

第四部：日本人としての、 アイデンティティを失うな

1. 篠原ブログ(79) 「名こそ惜しけれ」：日本人の美学の核

若いころ、ヨーロッパで、宗教とはいったい何なのかを考えさせられた。“お前は日本人だから仏教徒か”との質問に、仏教の教えに接したこともない存在としては、「ノー」と答えざるをえない。しからば無神論者なのか、と聞かれると、神がいるとかいないとかの話には答えようもない。問いかけてくる相手も私という存在をどのような範疇に当てはめているのかわからなくなる。なぜそのような「些細」なことに拘るのかとこれまた西欧人の考えに理解が及ばない。

キリスト教を信じる彼らにとって、信じる宗教を持たない人間は野蛮人であるか、あるいは得体の知れない存在とみなすということは、既にいくつもの書物で承知はしていたが、自分はなぜそうなのか、宗教なしでも別に何の支障もないことを適確に表現することはできなかつたし、彼らがなぜ宗教なしの人間を理解する基礎を持っていないのか、理解できなかつた。

後になって、司馬遼太郎さんの本を読むことで、問題のひとつは解決した。司馬さんがどのように記述されていたか、確かではないが、宗教は獰猛な人間を飼いならすために必要とされるという言葉に出会って、霧が晴れた。彼らには宗教が必要であり、自分たちが必要としているから、相手も必要としているに違いないとする。だから宗教を持たない存在は、自分たちが宗教を持たなかつた時の状態と同じく「野蛮」であり、だからこの「福音」を伝授したいという、お節介になるわけだ。

ところが、日本人は、宗教なしでも別に獰猛でもなく、野蛮でもなく、近代文明も受け入れているし、知識教養も高く、礼儀も正しい。いったいどうなっているのだ、ということになる。ここまで書いてきたようにこの疑問に当時は、私は答えられなかつたのだが、今ならできる。われわれ日本人は、人間存在の基盤に、「名こそ惜しけれ」という美学を持っているからこそ、キリスト教を信じる西欧人や、そのほかユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教等を信ずるどのような人々に対しても、同じ土俵で毅然と相対(あいたい)することができるのだ。

「名こそ惜しけれ」とは、いうまでもなく坂東武者の中に育った「美学」であり、生きるうえでの基本基準とでもいうべきものである。もちろん宗教ではなく、また哲学という概念にもあわない。この概念を定義するのは難しいので、私はこれを「美学」と呼んでいる。生きるうえでの、美意識に関する感性に基づく、基本的な姿勢とでもいっておく。

鎌倉時代から、現日本の原型は形作られたのだから、その社会におけるエリート層の武士の美学は次第に日本人全体のものとなっていく。「名こそ惜しけれ」自分の行うことには自分が責任を持つ、ということである。恥ずかしい仕事はできないということである。自分の名にかけて、物事はキチンとやるという自意識を高く持った誇り高い存在を支えている美意識なのだ。

農民が作る農産物、職人が作る制作品、これらを見れば、日本人は庶民の隅々までこの「名こそ惜しけれ」の美学を持っていたことがわかる。日系移民という、高等教育を受けたわけでもなく、熱烈な仏教徒でもない普通の民衆が海外の地であれほどの評価を得たのも、この美学が根底にあったからに違いないと私は確信している。

この美学は、戦後、高い品質の工業製品を生み出す原動力にもなった。工場の現場の一人一人が無意識であってもこの美学を持っていたがために、自分が関係した製品は、恥ずかしくないものを市場に出すのだという信念があった。今もあるはずだ。

今なら私は、外国の人々に説明できる。俺たちには「名こそ惜しけれ」の美学があるから、宗教はなくとも、まともな行動が取れ、まともな社会を運営することができるのだ。ただし、外国語で、このことを説明するのは相当に難しい。あれやこれやの実例を示しながら説明していかないと、理解を得るのは大変な作業となるだろう。

ともあれ、われわれ日本人がこの「名こそ惜しけれ」を忘れない限り、というより、まだ維持している人々が先頭に立って行動すれば、21世紀のこれからの困難な局面において、世界のパスファインダー(pathfinders)として尊敬を受け、世界の存続に貢献できることになるだろう。論理の展開の根底にはまともな哲学、人間とは何、どうあらねばならないかの原理原則がなければならず、幸いなことにわれわれはその原理を「名こそ惜しけれ」という一言で表現されるもので持っている。(2006/01/01 篠原正)

2.篠原ブログ(424) 二つの社会、あるいは、二つの世界

西洋世界の特徴は、国内においては二つの社会で構成されており、世界をコントロールするシステムも、上流の西洋国と下流のその他世界に分けて動かされているところにある。つまり、持てる者と持たざる者、金持ちと貧乏人、貴族と平民、エリートと大衆、高学歴と低学歴、将校と兵士、経営幹部と労働者、先進国と後進国、欧米とアジア・アフリカ・中近東・ラテンアメリカ、というようにくっきりとした区分けのもとにこの50年運営されてきている。

このような区分けとは異なる日本の伝統社会の中で育ってきた者には、西洋社会のこの在り様に接すると、何かしっくり来ない違和感を感じざるをえない。現在の世界のきしみは、この二つの世界・社会にその根本原因があることも推測できるものでもある。

この二つの世界・社会が出てきている根っこには多分、自己を中心に置いて対象物を客観的に眺める思考方式があるのだろう。そのような観察方法と分析方法によれば、自国の社会を眺め考える場合も、世界を眺め考える場合も、全体の把握は極めてシンプルなものとなりうるだろう。したがって、どのようにその対象物を経営していくかも極めて単純な方式に収めることができるようになる。

この「単純」であることが、西洋世界が全世界を主導してくることができた、もしかしたら、一番の要因なのではないか。もちろん西洋世界といっても、ラテン系とゲルマン系社会では、二つの区分けの徹底に強弱があり、あまり徹底できなかったラテン系大国の、ポルトガル、スペイン、イタリア、フランスが主導権をアングロ・アメリカに譲ることになったのも、なんとなく分るような気がする。

世界、国、社会、団体を経営するうえで、その方式が単純であればあるほどうまく行くと考えれば、文化や民族性や人間性などなどデジタルでは計れないあいまいなるものに思い煩うことなく進めるのが、一番成功するやり方ということになるのだろう。

この方式が極限まで単純化されたものが、現在の米国の諸政策に現れており、それが世界中のきしみを招いていることは多くの人を感じているところである。もちろんそれ以前においても、世界と社会の経営がうまくいったことで利益を享受できたのは国の中では上部集団であり、世界の中では先進諸国と自称している国々だけである。

そうではない下部集団と、世界の中のその他多勢国にとってはたまったものではないことになる。

二つの世界、二つの社会の方式は、また、例えばかつての植民地経営においても採用され、そこでも植民地経営に協力する現地の少数上部と組み、その他大衆という図式は守られ、植民地解放後に於いてもこの少数(ひとにぎり)の上部層と国民の90%という形は継続されてきている。

日本は、西洋世界に属さないのに、この少数上部国にまんまと属して来た。しかも、その社会の基本的なあり方は、西洋流の二つの社会ではないという、異色の存在としてこの100年ほどを過ごしてきている。

余談になるが、欧米資本の会社で働いていたとき、会社の幹部がコロコロ変わるのに閉口した覚えがある。特にCFO(Chief Financial Officer)は私の勤めていた短い期間(5年半)の中で確か6人ぐらい変った。全て外部から募集した人材である。このCFOが変わるたびに日本地域の売上・利益計画やら、為替変動対策等々を新たに「ご説明」申し上げることとなり、それが「閉口した」記憶の原因である。

同時に、彼ら新参の幹部が、ほとんど入社の日から、バリバリと業務を始めるのには驚いた。欧米の会社は各人の果たすべきファンクションが明確に定められており、そのファンクションに対応できる技能と知識を持った人が採用されるわけだから、驚くことはない。片や日本の会社であれば、新入の幹部あるいは中間管理職がその実力を発揮できるようになるまでは、少なくとも1年はかかる。その実例を多く見てきた者にとっては、やはり驚きであった。

日本の会社はそれぞれが村であり、村には村のしきたりがあるので、それに慣れるまでには時間もかかるし、仕事は顔と顔の「心意気」で遂行されることが多いので、顔が売れてスムーズに運べるようになるまでには相当の時間とお酒(ノミネーション)が必要となるわけだ。

考えてみると、欧米の集団というのは、傭兵の集りであり、傭兵の幹部は頭と腕次第で多額の報酬を得ることができるし、またそれが当たり前とされる。会社という集団で見れば、CEOの報酬が中間管理職の100倍ぐらいは当たり前で、その下の重役連は10倍ぐらいとなるだろう。因みに日本企業と違って製造部長には権限はなく、報酬も少ない。製造従事者達のモチベーションは極めて低い。(2007. 06. 27. 篠原泰正)

3.篠原ブログ(790)

二値文明:ラテンからゲルマンへ、そして中国へ

文明とは、民族・文化・宗教などの違いを超えて、その文明に参加する意欲のある人、その文明を理解できる頭を持った人、誰にも開かれている普遍性をもった人が基本的な存在条件である。一方、文化とは、一つの共同体の中で相当の年月を暮らすことで初めて身に付く個別的なものである。

文明とは、従って、単純であるという性質を免れないものであり、言葉を換えて言えば、単純であればあるほど広く普及し、また長続きするものである。同時に、普遍性を土台にする文明といえども、それが生まれ育った土壌である文化からまったく別個のものとして成立することはない。つまり、土着の文化の香りを引きずっていることになる。

われわれがその中で生きている現在の近代文明は、さかのぼれば、ギリシャ・ローマ文明を先祖にしており、そのあと、15-16世紀のルネサンスの直近の孫でもあり、いずれにせよ、大雑把に「西洋文明」としてくれるものではあるが、それまでの文明といささか、あるいは相当に異なるところがある。

発端のギリシャを除けば、それまでの文明の中心存在は大きく「ラテン」と呼ばれる地域、あるいはローマの文明の影響を直接的に受けた地域と民族であったが、既に2000年続く現在の近代工業文明の軸は、ゲルマン民族の支流であるアングロ・サクソンである。大げさに言えば、西洋において、文明の軸がラテンからゲルマンに移ったことになる。

この現文明の軸であるアングロ・サクソンは、直接的にローマ文明の影響を受けなかった集団であり、それだけに、彼らが中心となって始めた産業革命以降の現文明は、ローマ文明的な微妙な、あるいは繊細な、あるいは美的な、あるいは音楽的な、多分に「文化」と混じり合った陰影を引きずっておらず、それゆえになお一層普遍性、汎用性に富む文明となりえた。

その普遍性の最たるものとして、現文明の特徴のひとつに、「二値」の概念がある。つまり、ものごとを、1か0、黒か白、善か悪、正か邪、強か弱、勝つか負けるか、などなどに区分けして眺める方式、あるいは観念が現文明の底流にある。

一方、文化というものは、どこの文化においても、多かれ少なかれ、このようなイチゼロで量れない、多分に中間的な存在や考え方やものの観方を有しており、むしろその中間色にこそ、その文化の特色があるとも言える。

そのため、現文明を受け入れた集団、たとえば日本列島に暮らす集団にとって、頭の中の「二値」と身体に染み込んだ中間色の間で、常にある種の軋み(きしみ)があり、今に至るまで本質的なところではこのきしみは解消されていない。

イチかゼロかの観念は、言うまでもなく、「デジタル digital」の世界であり、自然科学に基づく工業技術が現文明の下ですさまじい発展をみせたのは、当然のところであった。

産業革命の始まりからおよそ半世紀遅れて、この二値に基づく近代工業化に参加した日本人集団は、この二値の観念が育っていたからがゆえに大成功を収めたわけではなく、技術を何らかの形に仕上げる上で必要な「技能」に優れていたがゆえに、まさに「得意に帆を上げた」形で近代工業化社会に変身できたことになる。

今日に至るまで、この、多分に文化的要素を含む技能を土台にした技術でもって、日本人集団はまだ世界の最先端にいるとはいえ、その存在を脅かす状態がこの四半世紀ほどの間に大きくなって来ている。それは、技能を必要としない「純粋二値」世界での技術の展開が主流を占めるようになったことで現される。

つまり、何でも「デジタル」が主流になった。二値技術は、典型的には情報通信(IT: Information Technology)の世界でもっとも威力を発揮する。工業製品のほとんどの分野で王座を明け渡したかに見える米国において、この「IT技術」だけは揺るがないポジションを維持しているのは、彼らが本質的に得意としている、このイチゼロだけで(極端に言えば)成り立つが故である。

この純粋二値化は、見方を変えて言えば、近代工業文明のステージが必然の行きつく先として現れたものであり、そのことは同時に、まさに文明の必須要素である、理解し応用できる頭さえあれば誰にでも開かれていることを、最終的に実現したとも言える。

初期のステージにおいて、あるいはつい最近20年ほど前まで有効であった「技能」が必要要素であったときには、それらの多彩な技能を有さない集団には、「技能」が、こ

の技術文明に参加する上でのバリアであった。純粋二値技術でことが成し遂げられることは、このバリアがなくなったことを意味する。

東の端とはいえ、元々一つのユーラシア大陸で文明を発展させてきた中国は、その本質において、日本人よりも遥かに、この二値を自然に受け入れられる要素を有しており、さらには、そのユーラシア大陸の南に位置するインドも同じである。

このことは、例えば、インドの人は数学に強いという話を思い起こすだけで十分納得できるだろう。IT技術を軸にしてインドが躍進しているのは、当然と言えば当然なのだ。

純粋二値の下での技術は、われわれが得意としてきた、相当のところまで文化的香りを含んだ、あるいは美学的要素を含んだ「技能」を、もう必要としていない。われわれの感覚で言えば、味も素っ気もない、無味乾燥のテクノロジーだけの世界が主流となってしまった。

西洋文明への新規参加者として、中国やインドが、初めて「得意に帆を上げて」参加し主導を取れるステージになってしまったことになる。

われわれが生きる道は、この純粋二値世界で正面から中国やインドと張り合うところではなく、美意識を土台に据えたところでの展開にあるのではないだろうか。このことはまた後でテーマとして取り上げたい。(2009. 05. 30. 篠原泰正)

4.「オープンイングリッシュ」と

日本人の「アイデンティティ」は、共存できる

何度も繰り返すが、世界の共通分野での「物・事・考え」を伝えようとするなら、論理的に筋道つけて説明しないと、理解を得られない。ただし、誤解されると困るが、論理性と「人間としての正しさ」は必ずしもイコールではない。

論理的にものごとを考え、表現する根元の所に、人間としての正しい「心」がなければ、論理的に怪しげなシステムを考え出し、論理的にとんでもない戦略を立案し、論理的に嘘をつく行いが横行することになる。論理的思考と表現能力を身につけることは、人間としての品質が向上することを意味する類ではない。

しかし世界の中で、それなりの役割を果たすためには、「面倒だけれど」論理性を身につける必要があるということは理解して頂き、且つ日本人としての「アイデンティティ」を失ってはいけないことを理解してほしいということである。

皆さん既に承知しているが、英語は対立の図式で表せる文化の下にある言語である。従って英語で事実報告や考え方や分析された情報を受け取る（主に読む）、英語で表現する、英語で討議するという場合には、英語力が高くなればなるほど、英語を母国語とする人の、この対立の図式の基で、思考や分析、議論を行うことにつながる。

これは、日本人としての「アイデンティティ」や、企業や国という団体の利益保持という面からは、極めて望ましくない危険なことでもある。実際のところ、英語およびその背景の文化にあるこの対立の図式が、今日の世界における様々な摩擦の原因の一つになっていると言える。

グローバルな環境で、英語で戦う戦士たちが、深い経験を積み、日本人であることを忘れなければ、そこから初めて、我々の、日本式の生き方を、英語を使って表現していく場面が見られるようになって考えている。そのように期待をしている。

日本人としての「アイデンティティ」は見失うな、英語の力は数段伸ばせ、と相反することを要求することになるが、それは日本人として克服しなければならぬ大切な事項と考えている。

キリスト教やイスラム教のような強烈な宗教を持たない日本人がなぜあれほどまでに秩序ある社会を保ってきたのか、西洋の人から見れば不思議であったろうが、われわれ日本人は、彼らの宗教の代わりに、「名こそ惜しけれ」という美意識、または美学を持っていた、というのが答えに成る。

この美学を失ってしまったら、日本人はまことに魅力のない存在である。そして、これからの世界に貢献することもないだろう。日本人が世界から共感を得るためにはまず、世界の人々とコミュニケーションができる、「開かれた日本語」すなわち、第二母語として普遍的事項を述べるための「文明日本語」を持つことが早道と考える。

言語の「橋」ができた後は、日本文化に根ざした日本語が武器となる。日本文化に根ざした日本語は、共生(自然や人間と)の精神と相手を思いやる優しさが根底にある。先にものべたが、人間の優秀さと論理力は必ずしも結びつかない。日本人としてのアイデンティティを見失うことなく対峙していけば、世界の人々から日本が、あるいは日本人が信頼され尊敬されるに違いない。そこには「名こそ惜しけれ」の日本美学が見える。

日本文化の基底には二つの大きな核がある。一つは自然物も含めての他者と共に生きる心であり、これは哲学といえるものかもしれない。もうひとつは美学、あるいは美意識といえるものである。この美意識は「名こそ惜しけれ」という精神上的の美学に現れてきた。生きる上での規律のようなものであり、かすかに西洋で言う倫理観に近いかも知れぬ。

この共生の心と美意識の上に、例え小さくてもいいから、なんとか論理的に考え、行動が出来る「2階建ての言語構造」を建築したいというのが「IPMA」の望みである。そうしないと、われわれの持つ日本の知恵を世界に伝えられないからである。論理的に考え行動することは、戦国時代に経験してきていることだから、まるで日本人はできないと言うわけでは訳ではない。意識さえすればできることである。

自分が伝えたいことを言語で表現して、他者に分ってもらうのは、並大抵なことではない。外国の人に伝える難しさを体で覚えるには、何か一つ外国語を学習することがもっとも有効な、あるいは基礎の作業となろう。その意味では、中学から「英語」を学ぶことは間違いではない。しかし、残念なことに、その成果が上がっていない。その理由は、英語教育のやり方が間違えているからだと思っている。

5.実践、日本人としての誇りとアイデンティティを失うな

日本企業のアメリカ現地法人でエグゼティブマネージャとして米国事業を牽引してきた友人(*)から聞いた話である。

『アメリカ人は自分たちの物の見方、考え方、生き方は正しいと思い込んでいる。従って自分が理解できない考え方や生き方に出会う、あるいは自分たちの利益を損なうことになれば、猛烈に非難をして攻撃してくる。赴任当初は拙い英語であったが、とにかく解りやすく誤解なく伝えるための英語(ジャパン英語?)つくりで大変苦勞した。

しかし、このジャパン英語が部下たちとのコミュニケーションの「**かけ橋**」となり、彼等と余談する機会が徐々に増えてきた。仕事を離れてのコーヒータイムで話題になるのが日本文化と日本語の難しさである。

例えば多くの日本人が好む「詫びさび」について聞かれたこともある。“贅沢をする、お金が無くても「心」を豊かにするための代替として生まれた「道」、例えば「茶道」「書道」「武道」などの話をすると、盛り上がり「サムライ魂」まで及ぶこともあった。

また多くの日本人は“人から受けた親切や恩義を、なぜ忘れないのか。たとえ利益にならない人でも困っていたら、なぜ手助けするのか”といった質問を受けることもあった。例えば「義理と人情」について話すには日本語でも難しい。自分の拙い英語でどのように伝えたのか、どこまで、うまく伝わったのか、その自信はない。しかし、そんな話を重ねていくことで、彼等との関係は良くなっていったのは確かである。

そして私は、日本人の物づくりに対する拘りが高品質で便利に使える製品を作りだしていることをアピールして、“我々は安心してアメリカ市場を開拓して、ユーザーの信頼を得て行こう”「シャシャン」で、やることになる。当時の自分には、日本人、アメリカ人という意識はしておらず、ある活動を共に行う集団、すなわち共同体「チーム」を強く意識していた気がする。もちろん、部下達への評価は、絶対に公正でなければならないという、自分への戒めは守れたと思う』

(*)私と友人とのお付き合いは古く、私に営業の「イ、ロ、ハ」を教えてくれた営業のプロフェッショナルである。私は、前に勤めていた会社の社訓が大変気に入っている。それは、「人を愛し、仕事を愛し、国を愛す」の三愛精神である。(矢間伸次)

—体験的陪審裁判必勝法—
「実践パテント・トロール対応戦略」

講師：株式会社小糸製作所（元）知的財産部長 長谷川修司

日本アイアール社創立35年の記念公講演で、長谷川修司さんに講師をお願いしました。講師の長谷川さん曰く「米国において「パテント・トロール」との特許侵害係争は、有効な反撃手段を持っていない日本企業にとって厄介な問題である。日本企業（日本人）は、「訴訟」で脅かせば最後には必ず屈して和解すると思われ、またその通りになるのが現状である」と。

長谷川さんは、そんな同調意識から逆らい「パテント・トロール」相手に「真向から勝負をしてカルフォルニア連邦地裁および「CAFC」で勝訴した体験を持った方である。長谷川さんは、大敵に挑む勇氣と精神を持ち合わせており、戦う大儀が明確で、かつ筋が通っている。「名こそ惜しけれ」日本人の美学、を持ち合わせた「侍」であることが外国人弁護士や関係者を感動させ、戦いの戦略、戦術を惜しみなく授け、味方になってくれたことが最大の勝因だと考えている。

長谷川さんは、戦いの心得として先ずは、敵方（パテント・トロール）の情報を収集し、分析することの重要性を説いている。つまり、訴訟はインテリジェンス力の戦いで、「情報を制する者が戦いに勝つ」、「戦うには自分を知り、相手を知る」という孫子の兵法を実践していたと思う。長谷川さんが作られた講演の「レジメ」から、戦うために必要な要件が具体的にみてとれる。↓

概要調査&深耕調査を徹底的に実施：相手の組織、所在地、代表者および関係弁護士の履歴、当該パテント・トロールとしての活動実績、保有特許、訴訟の意思決定者、本件以外の訴訟案件、本件訴訟による関係企業への拡がり等。また Key Person となる主要人物の、経歴、裁判地との関係、言動、考え方、性格、本訴訟の位置付け等。そして、主代理人の実力、履歴、年齢、著作物、言動、考え方、性格、等。

因みに「パテント・トロール」とは、実事業（製品の製造販売）をしていないため請われれば自らを安全地帯に置いて訴訟を武器に相手を一方的に攻撃することにより、高額な和解金（ライセンス料）を獲得している。米国でビジネスする日本企業は、彼等にとって「最高の得意先（カモ）」になっていないか、脅せば金になるという存在からも脱皮すべきである（長谷川）。（*）講演会は、大成功で受講者から多くのお礼を頂いた。

◆講演内容は、こちらから <https://www.ipma-japan.org/pdf/20170928.pdf>

5.さあ、どうする日本？

篠原ブログ(652) 西洋の没落:強欲の果てに

ドイツの歴史哲学者であるオズワルド・シュペングラー(Oswald Spengler)が1918年に「西洋の没落(The Decline of the West)」を表わしてから今年で90年になる。以降、何度も西洋の没落はささやかれたり語られたりしてきたが、西洋による世界支配という基本構図は変わっていない。

しかし、どうやら、今度こそ、西洋の没落は起こりそうである。ただ、問題は、西洋の没落が同時に地球の没落を意味しそうなところにある。地球丸ごとが彼らに引きずられて奈落の底に落ち込みそうなところに、厄介な、そして残念なポイントがある。

最大の問題は、自然物すべては人間のためにある、という厄介な考え方にある。これが、今われわれの前に広がりつつある地球崩壊の元凶なのだ。

われわれ日本人もこの150年、西洋のお仲間に入って「近代工業化文明」という名のお祭りに参加してきたので、地球を壊した点では同罪だから強いことは言えないが、西洋流の考えを捨てて日本流を前面に出せば、まだせめてもの罪滅ぼしができる余地がある。

日本人の考え方の中には、西洋を真似しての150年の間に随分と壊れてしまったが、まだ自然の恵みを「節度」をもって利用させていただくという軸が残っているはずだ。

日本人の心の中に、まだ自分が必要とする以上をむさぼるのは「強欲」である。という心が残っているはずだ。そして、この心こそ地球の非常事態に立ち向かうもっとも有効な武器となると思う。西洋にはこの心が無いから、放っておくと、彼らは最後の日まで「強欲—英語で greed という」の饗宴を広げるだろう。(2008/09/03 篠原泰正)

あとがき

私は、篠原先輩から、これまで預かってきた膨大な書き物」を読み返しながら「文化と言語」について勉強を続けているが、ひと区切りつけて自分なりに整理し、編集をして纏めたのがこの資料である。

プロの編集者に委ねれば、リッチな「書き物」に仕上がると思う。しかし私にはその能力がない。私にできることは、篠原先輩の書き物を残すことである。篠原先輩の考え方、生き方はすごいと思う。先輩に対する尊敬の念は、ますます強くなっていく。

私ごときが「あとがき」を書くことは荷が重い。ここは篠原先輩が尊敬してきた鈴木孝夫先生(2021年没)の書籍、「日本人はなぜ英語ができないのか」に書かれていることを引用させてもらった。篠原先輩の口癖は、鈴木孝夫先生は、こんなことをおっしゃっているという尊敬の言葉ばかりであった。

日本人はなぜ英語ができないのか 岩波新書 622 鈴木孝夫著作
1999年7月19日第一刷発行 2021年3月8日 第21刷発行

『インドやフィリピンの人々がそもそも英語を学ぶようになったのは、一口で言えばイギリスやアメリカといった宗主国の人間が、彼らを統治し搾取する際に、自分たちの意思が相手に伝わらなくては困るから、彼らに英語を学ばせたためです。要するにそ宗主国の一方的な都合で英語を教えたのであって、支配される側の自発から出た学習ではありません』p100

『アメリカと違うことを忘れるな、日本が米国政府から次々と突きつけられる、やれ「構造改革」だ「グローバル・スタンダード」だといった要求に従って、日本を彼らの望む彼らと同質の社会に、しかも私たちの経済的負担と心理的葛藤という代償を払って、どんどん改造していけば、日本はやがて「小さな」アメリカになるのが落ちです。しかもこのことは、日本が日本らしさ、日本の良さをどんどん捨てることを意味するのです。私は一人の日本人として、日本の文化文明にはほかの国には見られない素晴らしい点、美しいところがたくさんあって、それは世界全体の文化文明の進歩発展に大きく寄与できると確信していますから、日本のあまりのアメリカ化には賛成できません』。158P

『日本はいま、まさに国際的な生き残りをかけて、英語を使って発信しなければならない立場にあるのですから、英米人の英語だけが正しい英語だという、旧来の狭い考

え方から一日も早く脱却して日本式英語をむしろ意識的積極的に生み出す努力をしなければならぬ立場に立たされているのです』。P173

『日本の大学における外国語教育は、明治このかた、基本的には西洋の文化文明を、それとはまったく無関係に発達してきた日本という異質の国に取り入れ日本の国全体を可能な限り西洋化するという、それまで世界に類を見ない、じつに大胆な文明のパラダイム変換という国家目標に向かって、すすめられてきたものです。しかし…(以下略)』。P129

「余談」:引退をしてからは、自宅のノートパソコンで資料整理をしている。自分のパソコンを持ったのは初めてである。これまで会社で使っていたパソコンとは使いかたが違っているので、戸惑うことが多く恐々と付き合っている。これまでは、分からない事があれば周りの人が助けてくれた。操作を誤ってトラブルになれば管理者が解決してくれた。

今は自分で解決するしかない。しかしパソコンについて詳しくないので対処することができない。時折、パソコン画面に見たことがない「お知らせ情報(警告?)」が届くが、どうしてよいのか分からずストレスとなる。“怪しいお知らせは、注意しないと大変なことになる”、という話は聞いている。しかし、どんなお知らせが「安全なのか、ヤバイのか」の判断ができない。

とりあえず無視して誘導に入り込まずパスしているが果たして正しい選択であるか不安である。ネットで調べてもよくわからない。画面に入って来た「お知らせ情報」を写真に撮り、メモでも書き留めて週末にある人に見てもらおうことにしている。その結果「パスでOK」であることで安心している。また、どのような性質のメッセージなのかも教えてくれるので勉強にもなる。それにしても面倒である。

余談はさておき、今回のレポートの主題は、近代文明を受け入れながらも、日本人としてのアイデンティティを失わず国際社会で生き抜ける日本、日本人になろう、というたわいの無い能書きである。私の楽しみの一つに NHK テレビで、毎週放送されている「[プロジェクト X](#)」を観ることである。そこには“どんな難題であってもやり遂げるまで、諦めの悪い技術者達、あるいはリーダ達の物語である。(矢間伸次 2024/06/06)